Title	ヴェーバーとダウデン
Author(s)	梅津, 順一
Citation	聖学院大学論叢,18(2) : 21-34
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=92
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

ヴェーバーとダウデン

―ピューリタニズムの評価をめぐって―

梅　津　順　一

Weber and Dowden on Puritanism

Junichi UMETSU

This paper aims to clarify what Max Weber learned from Dowden's *Puritan and Anglican* in writing *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*. Through Dowden, Weber came to know the Puritan literature of Baxter, Bunyan and others, and discovered the Puritan faith and feeling of *Pilgrim's Progress*. Weber realized the impact of the doctrine of predestination on the solitary human soul. Dowden's comparison of the Pilgrim and Robinson Crusoe suggested to Weber the transformation of the Puritan Character to Economical Man.

Key words: Max Weber, Edward Dowden, Puritanism

一、はじめに
二、情報源としてのダウデン
三、バニアンの「巡礼者」をめぐって
1、「内面的孤独化」
2、「隣人愛の非人間性」
3、「救いの確証」
4、巡礼者とロビンソン・クルーソー
四、おわりに

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

一、はじめに

二十世紀初頭に発表されたマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1)（以下，『倫理』と略）は，今日社会科学における古典と評価されている一方，他方ではさまざまな論争を引き起こしていることでも知られる。これまで個別的な事例研究に基づく批判も数多く提出されているし，批判への反批判も含めて，論争を展望する書物もいくつか現われている。(5) だが，ながく続く論争が必ずしもある方向に集約していくことなく，むしろ新しい論点が加わり拡散する様相が見られることは興味深い現象といわなければならない。近年でも，日本ではヴェー

執筆者の所属：政治経済学部・政治経済学科
論文受理日2005年11月21日

バーの論証上の欠陥を指摘する羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪』が話題を集めたし，英文ではジェレ・コーエンの『プロテスタンティズムと資本主義―影響のメカニズム』がヴェーバーの立論を独特な形で細分化しその根拠を詳細に検討している。[3] ヴェーバー・テーゼはその問題提起の衝撃力としては学問の歴史上屈指のものだが，未だ決着しない論争の嵐に見舞われているのである。

ここではヴェーバー・テーゼの周辺にある問題として，ヴェーバーのピューリタニズムに関する見解の形成史，とくに，英文学者ダウデンの『ピューリタンとアングリカン』[4] がヴェーバーにあたえた影響を検討することにしたい。ヴェーバーは『倫理』で，プロテスタンティズム一般，とくにピューリタニズムについて，その教義から社会生活への影響までさまざまな指摘を行っているが，議論の基本的な筋道は，極めて単純である。すなわち，第一に，禁欲的プロテスタンティズムの信徒たちは，職業労働を基軸とする生活規律を身に付けたこと，第二に，その信徒たちの生活規律は近代資本主義的経済生活に積極的な影響をあたえたことである。以下ではそうしたヴェーバーのピューリタン評価に重要な示唆をあたえたものとして，英文学者のダウデンの著作に注目したいのである。ヴェーバーはダウデンに示唆を得て時代を映し出す文学作品に注目し，ピューリタンの性格学を作り上げているように思われる。

もとより，ヴェーバーがピューリタニズム，あるいはより広く禁欲的プロテスタンティズムを検討するうえで参照した文献は相当の数に上る。キリスト教の教会史，教理史，さらにはイギリス革命関連の文献も数多く参照されており，ヴェーバー自身はダウデンの影響を特別なものと注記しているわけではない。ダウデンへの言及は『倫理』の本文では，結論的部分でバニアンとデフォーとの関りで行われており，感覚芸術の拒否といったピューリタンの性格を指摘する上で，何箇所かダウデンの著作の参照を求めている。しかし，ダウデンの『ピューリタンとアングリカン』を精読して気がつくことは，ダウデンの影響が極めて大きかったことである。ピューリタン文献の選択の仕方から，ピューリタンの性格学の基本的特徴まで，ヴェーバーはダウデンの見解を重要な手がかりにしており，『倫理』の基本構想自体ダウデンの影響を無視しては考えられないとさえ思われるのである。

二、情報源としてのダウデン

そこでまず，ダウデンの『ピューリタンとアングリカン』の概要を知るために次に章別編成をあげておこう。

「第一章　ピューリタニズムとイギリス文学
　第二章　トーマス・ブラウン卿
　第三章　リチャード・フッカー
　第四章　アングロ・カトリック詩人，ハーバート，ヴォーン

第五章　ミルトン，市民的自由

第六章　ミルトンⅡ，教会的神学的自由，詩文

第七章　アングリカンとピューリタンの和解者―ジェレミー・テイラー，バクスター

第八章　ジョン・バニアン

第九章　サミュエル・バトラー

第十章　十八世紀への移行」

序文によれば，第一章「ピューリタニズムとイギリス文学」はすでに『現代評論』誌に発表されたものであり，第二章以下は，ダウデン自身が「長い間親しんで接してきた」個々の著者を，当時の宗教史的な背景のなかで論じたものである。したがって，第一章がいわばダウデンのピューリタニズム概論に相当し，その上でミルトン，バニアン，バクスターがピューリタン文学者として取り上げられている。著者によれば，エリザベス朝の文学が「ルネッサンスと宗教改革の影響が合流した国民精神の一致」に由来するものであったのに対し，続く十七世紀はその一致の破壊の時期であった。[(5)] 宗教上では教理的見解の対立が見られ，政治上では議会と国王とが激しく対立し，生活様式の側面でも対照的な姿がみられるようになった。これらは相互に関連しており，17世紀イングランドは宗教的立場で表現すれば「ピューリタンとアングリカン」の対立の時代ということができるわけである。もとより，ここでいうピューリタン的傾向が直ちに英国国教会からの離脱を意味したわけではないが，しかし明らかに異なった宗教的資質が見られたのであった。

ヴェーバーがこの書物を情報源として使用していることを端的に示すのは，この本から得られた具体的な知識をほぼそのまま『倫理』で紹介していることである。気がついた限り指摘すると，次のような箇所がある。

１、第一章第三節「ルターの天職概念」で引用されているクロムウェルの下院議長に宛てた手紙[(6)]

２、「救いを目的とするのは欲得づくであろうか」という疑問に対するバクスターの答[(7)]

３、ピューリタン的政治家ハッティンソン大佐の性格についての記述[(8)]

４、ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』に関する記述[(9)]

５、バトラー『ヒューディブラス』の関する記述[(10)]

６、クロムウェルがルネサンス期の芸術品を保護した記述[(11)]

これらはダウデンの記述を直接使用しているものだが，それぞれの箇所でダウデンへの参照は指示されていない。もちろん，ヴェーバーは博引傍証であるから一々典拠をつけるのは難しかったとしても，厳密に言えばその点についてヴェーバーの知的誠実を咎めこともできるかも知れない。

それはともかく，ヴェーバーがピューリタニズムに本格的に言及するのは，『倫理』「第二部　禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理，第一節世俗内的禁欲の宗教的諸基盤」の冒頭の部分である。ここでヴェーバーは「禁欲的プロテスタンティズム」として，17世紀西ヨーロッパにおけるカルヴィニズム，敬虔派，メゾジスト派，洗礼派から発生した諸教派を意味すると述べた後，ピューリタニ

ズムについても語っている。ヴェーバーはサンフォードの『大反乱の研究と回顧』を参照しながら，「この語〔ピューリタニズム〕は，本書では，どこで用いる場合にも，十七世紀の一般の用語法とつねに同じ意味で使用する。すなわち，オランダおよびイギリスにおける禁欲的傾向をもった宗教上の諸運動で，教会制度上の綱領や教理の差違を問わない。したがって，「独立派」，組合教会派，バプティスト派，メノナイト派およびクエイカー派を含む」と記している。[12]

実は，ここでヴェーバーが手がかりとしたサンフォードの書物自身ダウデンが言及しているものだが，[13] さらにピューリタニズムの文化的社会的影響を探る上で，カルヴィニズムの「恩恵による選びの教説」，すなわち「予定の教理」に注目したのも，ダウデンの影響であった。ダウデンは文芸批評家マシュー・アーノルドの指摘を参照しながら，ピューリタンの特徴的な宗教意識を「カルヴィニズムの予定の教理」と関連させて説明しているからである。アーノルドによれば，「ピューリタニズムは，パウロの書簡の不完全な解釈から主として引き出されたある種の教理，すなわち，予定，原罪，転嫁された義，信仰義認といった教理のために存在している。」これを受けつつダウデンは，ピューリタニズムでは予定の教理の影響もあって，神と人との関係の直接性が強く意識されている事実を重視している。もとより，広く「宗教改革自身が，宗教問題における自己意識を覚醒」させ，「外的な儀礼，規定，儀式」の重要性を失わせるものであったが，ピューリタニズムはその方向を徹底させていると考えるのである。

「ピューリタニズムは出来る限り，人間の見えない精神と見えない神の関係を，媒介されたものではなく，直接的なものと主張した。神は直接啓示の言葉で人間に語られるので，伝統をほとんど重視しなかった。また，人間的な儀式については，それが被造物と創造主の間に立つことから不信を抱いた。キリスト者の神殿の栄光は，神の子の心のなかの生きた神殿の神聖さなのである。……アーノルドが強調するカルヴィニズムの教理は，それが聖書的であると考えられ，人間生活のあらゆる場面に直接に神の主体を持ち込むと考えられることから支持された。予定とは，地球上で起こるあらゆる行為と思想に対して，神があらかじめ知り，かつ意志していることを意味している。」[14]

また，ダウデンはピューリタニズムの神学体系がカルヴィニズムの影響の下にあり，ウェストミンスター信仰告白と関連付けているが，これもまたヴェーバーに示唆を与えたものであった。

「精巧な神学体系が構築され，カルヴァン学派の体系の大意は，ウェストミンスター信仰告白と大小の教理問答のうちに働いていることが知られる。・・・小教理問答だけでも熟知したものは，あらゆる事柄を一貫した計画と解釈する確固とした努力を身につけ，それによって与えられる利益をもつようになる。」「神の栄光を現わすため，あるものを永遠の命に予め定め，他のものを永遠の死に定める神の永遠の定め。この世を無から創造したこと，創造主はこの世界に対し，絶えず，賢明に，神聖に摂理を持って支配すること。神の人間との契約，罪の継承，キリストの仲介，恩恵の抗しがたい性質，有効な召命，終わりの日までの聖徒の堅忍，天国における永遠のよろこび，地獄における終わりなき歯ぎしり」，こうした予定の教理の主題は，信徒の性格に大きな作用を及ぼしたと

考えられたのである。[15]

さらにダウデンが，ピューリタニズムの道徳神学体系について次のように指摘していることも注目される。

「宗教改革の神学者が教理の巨大な構築物を作り上げたと同様に，プロテスタントの道徳学者や決疑論者は，それに対応する行為の体系を細部にまで描き出した。決疑論の研究は，パーキンズ，エイムズといったピューリタン神学者から，サンダーソン，ホール，ジェレミー・テイラーの手に渡された。リチャード・バクスターの『キリスト教指針：実践神学と良心の諸問題の集成』は，キリスト教倫理学，すなわちキリスト者の個人的義務から，家政学，すなわち家族の義務へ，さらに教会論，すなわち教会の義務，キリスト教政治学，すなわち支配者と隣人への義務と続いている。義務および義務の違反の一覧表は，精密に仕上げられ，自由で寛大な善への志向がもつ幅広さを犠牲にしているように思われるが，人間生活にあらゆる行為を揺るがせにしない良心の姿を示していることは疑いない。」[16]

見られるように，ここでダウデンはピューリタンの決疑論にも及んでいるが，これもヴェーバーには貴重な指摘であった。よく知られるようにヴェーバーはピューリタニズムの職業倫理を跡付ける上で，バクスターの決疑論すなわち『キリスト教指針』を重視しているからである。とすれば，カルヴィニズムからバクスターまで，ヴェーバーのピューリタニズム論は，ダウデンの論述の順序と対応していることが注目される。ヴェーバーはピューリタニズムに関する個々の情報をダウデンに依拠していただけでなく，ピューリタニズムの基本的な性格付けもそこに学んでいるのである。

三、バニアンの「巡礼者」をめぐって

１、「内面的孤独化」

ところでよく知られるようにヴェーバーは，カルヴィニズムの予定の教理が当時の人々に与えた内面的衝撃を次のように印象的に描き出していた。

「この悲愴な非人間性をおびる教説が，その壮大な帰結に身をゆだねた世代の心に与えずにはおかなかった結果は，何よりもまず，個々人のかつてみない内面的孤独化の感情だった。宗教改革時代の人々にとっては人生の決定的なことがらだった永遠の至福という問題について，人間は永遠の昔から定められた運命に向かって孤独の道を辿らねばならなくなったのだ。牧師も助けえない……聖礼典も助けえない……また教会も助けえない。……最後に，神さえも助けえない，―キリストが死に給うたのもただ選ばれた者だけのためであり，彼らのために神は永遠の昔からキリストの贖罪の死を定めてい給うたのだからだ。」[17]

すなわち，「予定の教理」は「個々人のかつてみない内面的孤独化の感情」をもたらしたというのだが，ヴェーバーはこの箇所との関連で「ピューリタニズムの感覚文化の拒否」を示唆している。

この「人間の内面的孤立化は，一切の被造物は神から完全に隔絶し無価値であるとの峻厳な教説に結びついて，一面で，文化と信仰における感覚的・感情的な要素へのピューリタニズムの絶対拒否的な立場の……さらに，彼らのあらゆる感覚的文化への原理的な嫌悪の根拠を包含することになる。」とも言われるからである。[18] これと関係させて，ヴェーバーは「（ピューリタニズムにおいて神との）最も深い交わりは，制度や団体や教会の中にではなく，孤独な心の秘めごとのなかにある」とのダウデンの記述を引用し，またピューリタニズムには「感覚文化」に対する拒否があるとのダウデンの指摘についても同書の参照を求めている。そのダウデンの記述は『ピューリタンとアングリカン』におけるバニアン論に見られるものに他ならない。

事実ヴェーバーも，カルヴィニズムの「特有な雰囲気がもたらす独自な影響を感得しようとするなら，ピューリタンの文献のうちでももっとも広く読まれたバニアンの『天路歴程』のなかの，〔主人公で巡礼者の〕クリスチャンが」参考になるという。すなわち主人公クリスチャンが，「『滅亡の町』に住んでいることに気づき，一刻も躊躇せず天国への巡礼に旅立たねばならぬとの召命を聞いてから後とった態度の描写を見るべきである。妻子は彼にとり縋ろうとする。一が，彼は耳をふさぎ，『生命を，永遠の生命を』と叫びながら野原を駆け去っていく。根本においてただ自分自身の救いのみを考えるピューリタン信徒たちの情感を描き出したものとして，どんなに洗練された筆致も，この獄中に筆をとって宗教界の好評を博した鋳掛屋の単純な感覚に及び得ない」というのである。[19] ヴェーバーは，永遠の命を求めつつ旅立つ巡礼者のなかに，ピューリタンの人生への態度の典型を見出したわけである。

こうしたヴェーバーの判断自体は，ダウデンのバニアン論によって触発されたものであった。ダウデンはバニアンを論じる際に，その『天路歴程』が「ピューリタンの信仰と感情の特徴的産物」であることを記した後，それが「神とサタンと孤独な人間の魂」が織り成す内面的なドラマであるとして，次のように描き出している。

「制度，教会，規程，聖礼典，儀式は，ほとんどあるいはまったく助けられない。滅亡の町から天の町への旅は，各人によって自分自身のために特別な召しとして始められた。途中で仲間が加わるのであれば，行く道の試練を軽くする。しかし，仲間であってもそれぞれは個々の巡礼者であり，重大な個人的冒険に踏み出し，暗い川に入りむときには，一人一人が希望と恐怖の経験を引き受けなければならない。だが，各人のきわめて個人的な事柄を通して，共通の魂が見られるのである。誰かに人生の重大問題のなかのもっとも個人的な経験を記録させれば，彼の言葉は他の魂のなかに無数の反響を引き起こすのである。深い交わりは制度や団体や教会の中にではなく，孤独な心の内奥に見出されるのである。」[20]

ここには，バニアンの描く巡礼者（主人公―クリスチャン）の天国への旅が，孤独な旅であり，教会，聖礼典，儀式の力を当てにすることができない救いへの道であったことが記されており，先のヴェーバーの記述はそれをアレンジしたものであることが知られるのである。また，次のような

ダウデンの論述もヴェーバーに影響を与えた。

「バニアンの自伝を読めば，彼が，天国は紛れもない事実であり，地獄は自分の魂と同じ様に現実的であると確信していることが分かる。一方には永遠の至福，純粋，光があり，他方には永遠の苦悩，暗黒，歯噛みがある。……人間生活のはかなさに気がつき，天国と地獄の間で，細い糸によって吊り下げられ，喘いでいる，感受性のある，感情的な人間を想像してみよう。……バニアンの心理状況はそのようなものであった。魂はひどい罪意識，切迫した死，確かな裁きに押しつぶされそうである。彼を招いている神がいる一方，何千もの悪魔が彼を支配しようと待っている。バニアンができることは，ただ指で耳を塞いで，地上のあらゆる声に耳を閉ざし，後ろを振り返るのを拒み，『命，命，永遠の命』をと叫びながら走りだすことであった。しかし，彼の前に横たわる路は，短くもなく平坦でもなかった。」[21]

たしかに，ヴェーバーはピューリタンの「内面的孤独化」を，ダウデンのバニアンに関する記述を手がかりに描いていたのである。

２、「隣人愛の非人間性」

ところで，ヴェーバーはこうした「カルヴィニズムの信仰による個人の内面的孤立化の圧力の下で」，キリスト教の「隣人愛」がある「独自な色調」を帯びることになると指摘している。すなわち，『天路歴程』の主人公のように，ピューリタンは自己の救いのために孤独な中で歩むことになるが，その来世を志向する歩みは実際には現世における課題を力強く遂行することにあった。ヴェーバーによれば「現世にとって定められたことは，神の自己栄化に役立つということであり，……選ばれたキリスト者が生存しているのは，それぞれ持ち場にあって神の戒めを実行し，それによって現世において神の栄光を増すためであり，―しかもそれだけなのだ。ところで，神がキリスト者に欲し給うのは彼らの社会的な仕事である。」すなわち，神は合目的的に「社会的秩序の秩序と編成」を行っており，キリスト者はそこで与えられている役割を果たすことが求められたというのである。[22]

ヴェーバーのこうした指摘もまた，ダウデンにヒントを得ているように思われる。ダウデンはピューリタニズムにおける精神の内面性と世俗的事柄への関心との結びつきを次のように指摘している。

「ピューリタン的党派は，その成員の多くが真に精神の内面性をもち，来世すなわち天に眼を向けているのであるが，現世的事柄に情熱的関心を持っていることは，不思議な矛盾することと最初は思えるかもしれない。明らかに，彼らは不当な徴税とか国家における恣意的な権力の行使といった物的な関心をもっていた。また，儀礼主義的な攻撃とか，彼らの良心が命じた礼拝の自由の主張への侵害といった，教会的な関心もあった。だが，そうした信仰が現世的事柄における活動を弱める，あるいは損なうと想定するのは間違いである。彼らの信仰は，神聖な象徴物とか芸術的な栄光や華やかさによってではなく，行為と公共的な活動によって，外側に現れ出るものであった。この世の

秩序は神聖な秩序であること，一人一人はそれを維持する上で与えられた役割があること，闇の権力と光の権力の間に，大きな闘争が進行していること，勝利は主の側にあるが，人間的道具 human instruments を通して実現されること，こうした信仰によって，信者たちは至高の支配者のためにあらゆる力を発揮するよう励まされたのである。」[23]

ヴェーバーはピューリタンの「社会的仕事」が，「事象的・非人格的な性格」を持つとも指摘していた。それは，ピューリタンの他者への態度が，神との関係を第一に考えることから，人間相互の自然の情愛を抑圧してしまうことを意味する。ヴェーバーはその間の事情を，『天路歴程』の主人公は，「自分が救いの地点に到達したあと，はじめて家族も傍らにいればよいとの考えが目覚めてくる」と語っている。[24] ダウデンにはこの記述を直接示唆した箇所は見あたらないが，次の記述がそれに近い。「バニアンは深いやさしい感情をもつことができた。クリスチャンは『妻や可愛そうな子どもたちは私にとても親密であったと考えてもらってよい』と言いつつ，妻を持ちながら，彼は持っていないかのようでなければならないと考えた。」[25] また，ダウデンがピューリタンは「秩序ある人生，秩序ある家庭，秩序ある国家」を目指したというとき，ピューリタン「聖徒たちの行為への起動力は，ひたすら現世の合理化への努力となってほとばしり出た」というヴェーバーの記述を想起させるものともいえるのである。[26]

3、「救いの確証」

このようにヴェーバーはダウデンのバニアン論を手がかりに，ピューリタン信徒の内面世界と社会的行動とを跡付けたのであるが，ヴェーバーはこうしたピューリタン信徒の行動には「救いの確証」を求める動機があったことも指摘していた。すなわち，「地上の生活のあらゆる利害関心よりも来世の方が重要であるばかりか，むしろさまざまな点で一層確実とさえ考えられていた時代において……かならずや，信徒の一人びとりの胸には，私はいったい選ばれているのか，私はどうしたらこの選びの確信がえられるのか，というような疑問がすぐさま生じてきて，他の一切の利害関心を背後に押しやってしまったに違いない。」人々はこの救いの不安に駆られて，「誰もが自分は選ばれているのだとあくまでも考えて，すべての疑惑を悪魔の誘惑として斥けること」，「日ごとの闘いによって，自己の選びと義認の主観的確信を獲得する」ことが勧められたというのである。[27] ここでヴェーバーはバニアンの『天路歴程』への参照を求めているが，これもまたダウデンのバニアン像から引き出されたものであった。ダウデンはピューリタニズムにおける人生のイメージは次のようであったと指摘している。

「人間は過ぎ去る束の間の被造物である。……すでにその運命は定められている。しかし，―まったく不思議なことに―人間は自由で責任ある存在であり，自分自身の裁判官になる。……七十年ほどの人生―永遠のなかの芥子粒―は，厳粛な審査と試みの瞬間として，崇高なものとなる。不注意なものには，取るに足らない偶然的なことすべてが，真実には神の秩序の一部である。しかも，

この秩序には立法者の突然の介入が含まれている。不思議にも自由意志を与えられた人間は，偶然の世界をさ迷うものではない。むしろ，厳格でかつ恵み深い支配者の，忠実なもしくは不忠実な臣下なのである。人間は巨大な戦闘のなかで与えられた持場がある，力強い計画のなかの持場である。」[28]

この世の歩みによって救いか否かが決まるという捉え方は，バニアンの自伝的著作『罪びとの頭に溢れる恩寵』にも見られるとダウデンはいう。

「天国と地獄は彼にとっては，少なくとも，道路や自分の足で歩んだベドフォードの野原の小道のように，現実的なものであった。……この僅かな死すべき地上での日々は，〔永遠の〕生命か死かを決定するゆえに，非常に重要であったが，終わりのない悦楽や苦悶の混沌のなかで失われてしまう。」[29]

それに，『天路歴程』におけるクリスチャンの旅路自体が，孤独な魂と悪魔と神の格闘の記録であり，救いの確証をもとめる闘いの日々でもあった。その歩みは激しい感情の起伏によって彩られていたが，たしかに前進しつつあったのである。

「第一に，罪の確信と死と裁判の恐怖が生まれた。それからしばらくして，彼の描く巡礼者のように，律法屋のすむ道徳の村に立ち寄った。彼は彼自身の義を確立しようと努めた。彼は敬虔な人物と評判になったが，結局は『哀れな表面だけの偽善者』に過ぎなかった。最後に，彼は彼自身，彼を離れ，彼を超えるものに全面的に身を委ねた。神の偉大な力があって，彼はそれに従ったのである。苦悶に満ちた内省によってでも，道徳的な操作によってでもなく，彼は自分の魂を救うことができた。彼は精神的なエゴイズムをすべて断念し，ただ神の事物の秩序に自分自身を投げ入れなければならなかった。」[30]

このようにバニアンの人生を象徴する『天路歴程』の巡礼者の歩みは，この地上において来世の至福を確認しようとする歩みであり，ピューリンが「救いの確信」を求めつつ「組織的自己審査」を繰り返しつつ日常生活を作り上げていくというヴェーバーの捉えかたにに大きな手がかりを与えるものであった。[31]

４、巡礼者とロビンソン・クルーソー

ところで，ヴェーバーは自己の救いを確証しようとするピューリタン信徒の営みが，神との取引を思わせるところがあり，したがって救いを確実にしようとする生活は事業経営的な性格を帯びることも指摘していた。すなわち，厳格なピューリタン信徒は「恩恵の地位」にあるかどうかを，「罪と誘惑，それに恩恵による進歩のあとを継続的にあるいはまた表にして記入する信仰日記」をつけたのであるが，そこでは「罪びとと神の関係が顧客と店主の関係にたとえられている」。すなわち，救いを確認する信仰日記は，利益を把握する営業の記録に似てくるというのである。「後期のピューリタンたちは自分の行動ばかりでなく，神の行動をさえも審査して，生涯のあらゆる出来事

のうちに神の指を見た。……こうして生活の聖化は，ほとんど事業経営という性格さえももつものとなった。」というわけである。[32]

このヴェーバーの記述はバニアンを素材としていることからダウデンとの関係が注目されるが，しかしこの記述を直接的に想起させるものは見当たらない。しかしそれに近い記述として，たとえば，バニアンが来世での救済を求めることは，現世的な自己利害の追求と似ているのではないかという次のような指摘が紹介されている。

「来世的という言葉が，バニアンのような気質の人には，非難の言葉として用いられる。この地上の世界の関心事に専念するものは，現世的である。しかし，バニアンの精神を悩ます警告や希望，苦悶や歓喜を生み出す将来の問題に関ることは，同じく自己利害に心を向ける心の習慣ではないのか。時代の営業に没頭する人と，永遠の関心事に献身する人の間には，後者がより高度な自己中心性をもつ以外では実質的な違いがないと理解してはどうかと提示されている。」[33]

ダウデン自身はバニアンを現世的と考えはいないが，自伝に見るところでは，「彼は神との間で，実際的な仕事のように，取引の清算をしなければならない。実際恐ろしい取引だが，営業の原則で為されなければならない。」[34] と指摘している。その限りではダウデンもバニアンの宗教的な行動に，形式的な意味で取引行動との類似性を見ているのである。また，バニアンの『ミスター・バッドマンの生涯』は，『天路歴程』の巡礼者とは逆に，地獄に転落する人物が主人公であるが，その悪徳は彼の職業生活を通して描かれている。ダウデンはそこで当時のイギリスの中産階級が描かれていることも語っているから，ヴェーバーに信仰生活の職業生活としての側面を見る視点を与えたといえるであろう。

ところで，ダウデンはバニアン論の末尾で，『天路歴程』とダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』の興味深い比較を行っている。

「バニアンの時代の道徳的気質は，17世紀の宗教的想像力のもっともよく読まれた作品である『天路歴程』と，バニアンの後の世代のもっともよく読まれた想像を掻き立てる作品，すなわちバニアンと同じくイギリス人の特徴をよく表し，バニアンと同じくイギリス人の天才的解釈としてひろく受け取られている作品と比較すれば，おそらく一層生き生きと感じ取ることができる。その作者はバニアンと同じく民衆の出身で―バニアンと同じく，宗教的な非国教徒に属し，その書物はバニアンと同じく，寓意物語であり……その寓意物語は，バニアンと同じく彼の人生と直接の関係をもっている。……共通性の点でははっきりとしているが，天路歴程とロビンソン・クルーソーほど，傾向において本質的な違いを表現しているものはない。」[35]

ダウデンはバニアンとデフォーの違いを，時代の変化，すなわち宗教の戦争から貿易の戦争の時代への変化から説明している。

「王政復古とともに物質的利害が国中で支配的となった。ミルトンとバニアンは，ある点でいえば，過去の生き残りである。この時代の雰囲気は，『天路歴程』よりも，バトラーの『ヒューディ

ブラス』によってより正確に表現される。神学的情熱は次第に科学的な好奇心に概ね置き換わり，説教壇の激しい勧告に代わって，ティロットソンを教師とするキリスト教道徳の教えが現れてくる。一連の政治的，教会的，哲学的な妥協は，進歩の道筋を滑らかにする当座の工夫として役に立つこととなった。中産階級は富と権力と影響力とを増していった。精神的な高揚や絶望の舞台であった，険しい絶壁と孤独な谷間の後には，冒険はないものの安全な，耕しかつ建てることができる平坦な土地にやってきたのである。二つの世界を最良に利用することは，……賢明な人のすることである。神の摂理は疑いなく認められたが，その摂理は自助努力によって補われるのが望ましかった。」[36]

ヴェーバーはこのダウデンの記述を受けつつ，その時代の変化を「純粋に宗教的な熱狂がすでに頂上を通り過ぎ，神の国を求める激情がしだいに醒めた職業道徳へと解体しはじめ，宗教的根幹が徐々に生命を失って功利的現世主義がこれに代わるようになったとき―すなわち，ダウデンの言葉を借りれば，民衆の想像力になかで『虚栄の市』のただなかを天国に向かって急ぐバニアンの『巡礼者』の内面的に孤独な奮闘に代わって，『ロビンソン・クルーソー』つまり同時に伝道もする孤立的経済人が姿をあらわしたとき」と言い換えている。[37] ヴェーバーの議論においてこの変化は，禁欲的な宗教運動が「経済への影響力を全面的に現わすにいたった」時，「独自の市民的エートス」が生まれた時期を意味したのである。ヴェーバーはダウデンを通して，「プロテスタンティズムの倫理」の典型としてバニアンの巡礼者を想定し，それが「資本主義の精神」へと転換していく過程にデフォーのロビンソン・クルーソーを置いたのであった。次のようなダウデンのロビンソン・クルーソーの性格づけも，ヴェーバーにヒントを与えるものであったと考えられる。

「デフォーの難破した船員の物語は，自助の精神に関する英語による散文の叙事詩的物語である。クルーソーは，孤独な英雄であり商工業者の子弟だが，普通以上の知性と稀な意志力を持つが，巡礼者ではない。……彼は，頭には帽子，食物，食物を手に入れる道具，それに同居人はオウムと子ヤギだけだが家庭をもち，またイギリス人の品位と慰めを表現するものを必要としている。また，天との取引ができるように，聖書を一冊もっている。次第に，彼は植民地の統治者で，武器と福音書をもつ素人宣教師となっていく。彼はまた同時に，自分のもつ『ナイフや挟み』などを，彼がよろこんで文明的な衣服の使用と聖書的信仰へと導こうする，教育を受けていない野蛮人と取引することに無関心ではない。彼の道徳は明白でかつ平易である。活力と工夫と決意とをもって，もっとも困難な状況においても，自分の生活をどうしようもない所から向上させ，かつて背いた神とともに，将来の事柄を満足すべき状態にすることさえできるのである。」[38]

四、おわりに

以上，ヴェーバーが『倫理』においてピューリタニズムを評価する上で，ダウデンの『ピューリタンとアングリカン』を重要な手がかりとしたことを明らかにした。ヴェーバーはダウデンから

ピューリタニズムに関する印象的な事実を知っただけでなく，ピューリタニズムの全体的な捉えかた自体ダウデンに多くを負っていた。先に指摘したように，ピューリタニズムの定義について参照したサンフォードの書物もダウデンの著作から知ったものだし，ヴェーバーのピューリタン文献の選択それ自身もダウデンに示唆を受けたものであった。とくに，ヴェーバーがピューリタン牧師の代表者として注目したバクスターの位置づけ，それにヴェーバー自身が克明に検討したバクスターの主著である『キリスト教指針』と『聖徒の永遠の憩い』もまた，ダウデンを通して知ったものなのである。(39)

また，ピューリタニズムの実践的な起動力もダウデンに由来するものであった。ダウデンはマシュー・アーノルドを参照しながらカルヴィニズムの「予定の教理」の内面的な衝撃力を説明していたし，ヴェーバーがピューリタンの心理的メカニズムを明らかにする上で用いた，「内面的孤独化」「救済の確証」といった方法概念は，ダウデンが描き出すバニアンの『天路歴程』の巡礼者の姿から導きだされていたのである。来世を志向しながら現世での行為に情熱を注ぐことも，バニアンを手がかりにしており，その現世の生活が事業経営の性質を帯びることも，そこで示唆されていたのである。

もとより，ヴェーバーの『倫理』の主題は，「プロテスタンティズムの倫理」と「資本主義の精神」の関連を明らかにすることにあった。いわば召命と職業との二重の焦点を持つ「プロテスタンティズムの倫理」において，次第に職業の比重が高まって行くことが展望されたのである。実は，そうした見通しもまた，ダウデンに負うものであった。ダウデンはバニアンの巡礼者とでフォーのロビンソン・クルーソーを比較した記述に示唆されて，宗教倫理から「資本主義の精神」への転換を展望することができたのである。もちろん，ヴェーバーがこの論文を書く上で参照した文献は数多いが，ヴェーバーの議論の大筋を作り上げる上で，ダウデンに示唆されたところが極めて大きいといわなければならない。

むしろ，ヴェーバーの『倫理』の議論の骨組みはダウデンを読むことで重要な裏づけを与えられたのであった。それに加えてヴェーバー論文には，ダウデンから示唆を受けたと考えられる重要な論点がいくつかある。一つは，いわゆる「呪術からの解放」であるが，ダウデンにはバニアンの世界もロビンソン・クルーソーも，魔術とは無縁であったことの指摘があるし，(40) ピューリタニズムをイギリスのヘブライズムと評したくだりも，ダウデンに由来しているのである。(41)

では，最後に以上のようなヴェーバーのダウデンへの数々の依存から，ヴェーバーの知的世界が危ういものであって，内容が乏しいと結論づけることが出来るであろうか。私の判断はむしろ逆であり，ヴェーバーはダウデンのような優れた第二次文献を手がかりにして，独特な自己の学問世界を作り上げているのは確かであるが，そこにむしろヴェーバーの非凡な閃きを見出すこともできるのである。ヴェーバーは一次文献を積み重ねて議論を組み立てたのではなく，二次文献の独特な読み方から問題を発見していった。そのヴェーバーの鋭い洞察にダウデンを離れて実証的な根拠があ

るかどうかを判断することは別の課題に属するのである。

注

(1) マックス・ヴェーバー，大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（岩波書店，1988年），Max Weber, “Die Protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus,” in *Gesammelte Aufsätse zur Religionssoziologie*, Bd.1, (Tübingen, 1920), 大塚訳では，原著のページも記されているのでここではそれを省く。なお，この論文は1904- ５年に雑誌論文として発表された後，宗教社会学論集に収録されたのだが，その際大幅な加筆がなされたことも知られている。次の翻訳では，改訂作業が確認できて便利である。安藤栄治編，梶山力訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（未来社，1994年）。なお，最近刊行されたカールバーグによる新しい英訳は，解説，索引などが充実している。Stephen Kalberg tr., *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, Third Roxbury Edition (Los Angeles, 2002).

(2) 近年の研究を展望したものとして，梅津順一「ウェーバー・テーゼとピューリタニズム」，深井智朗・フリードリッヒ・グラーフ編『ウェーバー・トレルチ・イエリネック』聖学院大学出版会，2001年。

(3) 羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの犯罪』（ミネルヴァ書房，2002年）Jere Cohen, *Protestantism and Capitalism: The Mechanisms of Influence* (New York, 2002). なお，羽入に対する書評論文として，梅津順一「羽入辰郎教授のマックス・ヴェーバー告発について」，『聖学院大学論叢』17-1，2004。

(4) Edward Dowden, *Puritan and Anglican: Studies in Literature* (New York, 1901).

(5) *Puritan and Anglican*, pp. 1, 2.

(6) *Puritan and Anglican*, p. 13.『倫理』83ページ。

(7) *Puritan and Anglican*, p. 241.『倫理』142ページ。

(8) *Puritan and Anglican*, p. 22.『倫理』249ページ。

(9) *Puritan and Anglican*, pp. 12.『倫理』267ページ。

(10) *Puritan and Anglican*, pp. 302.『倫理』242ページ。

(11) *Puritan and Anglican*, p. 25.『倫理』247ページ。

(12) 『倫理』103ページ，注３。John L. Sanford, *Studies and Reflections of the Great Rebellion* (London, 1858), p. 65f.

(13) *Puritan and Anglican*, p. 24.

(14) *Puritan and Anglican*, p. 11.

(15) *Puritan and Anglican*, pp. 17, 18.

(16) *Puritan and Anglican*, pp. 19.

(17) 『倫理』113, 114ページ。

(18) 『倫理』114-115ページ。ダウデンは「カトリックは，感覚と精神は融合」するものと捉えるのに対して，「ピューリタンは，それを否定し，自然と超自然を和解できないこととした」ことから，ピューリタンの感覚芸術へ否定的態度を次のように説明している。「カトリック的考え方では，文学や芸術が必要とする，思想の感覚的な乗り物をより容易に見出すことができる。見えないものを見えるものによって解釈する。美とか色彩や人生の楽しみを疑わしいものとしないで，それらを聖なるものと相互に浸透させようとする。」「他方，ピューリタンにとっては，……自然的なものと超自然的なものは，媒介されない二元論として存在し，―宗教的であれ，倫理的であれ―思想そのものに感覚的な媒介物をまとわせたり，身体を与えたりすることは難しい。だから，ピューリタニズムそれ自身は，偉大な芸術を創作するのには適していない。しかし，魂の内的な生命は強力である。」*Puritan and Anglican*, pp. 8, 9.

(19) 『倫理』116ページ。

(20) *Puritan and Anglican*, p. 234.

(21) *Puritan and Anglican*, pp. 240, 241.

(22) 『倫理』120, 121ページ。
(23) *Puritan and Anglican*, pp. 22, 23.
(24) 『倫理』116ページ。
(25) *Puritan and Anglican*, p. 237.
(26) *Puritan and Anglican*, pp. 11, 12,『倫理』123ページ。
(27) 『倫理』125, 126ページ。
(28) *Puritan and Anglican*, p. 27.
(29) *Puritan and Anglican*, p. 237.
(30) *Puritan and Anglican*, p. 250.
(31) 『倫理』134, 135ページ。
(32) 『倫理』156, 157ページ。
(33) *Puritan and Anglican*, p. 239.
(34) *Puritan and Anglican*, p. 237.
(35) *Puritan and Anglican*, pp. 274, 275.
(36) *Puritan and Anglican*, pp. 275.
(37) 『倫理』260ページ。
(38) *Puritan and Anglican*, p. 276.
(39) ヴェーバーはダウデンが言及していないピューリタン文献としては,『イギリス・ピューリタン聖職者著作集』*Works of the English Puritan Divines*, 10vols., (London, 1845-48) に注目している。そこにはトマス・アダムズ，ジョン・ハウ，マシュー・ヘンリー，ジェインウェイ，チャーノック，バクスター，バニアンの小冊子や説教が収録されている。
(40) 「ピューリタニズムの想像力を除けば，人間の魂の周辺には魔術の世界があった。」*Puritan and Anglican*, p. 26.「クルーソーは魔術の書物も魔法の杖も持っていない」*Puritan and Anglican*, p. 277.『倫理』114, 117ページ。
(41) *Puritan and Anglican*, p. 34.『倫理』234ページ。